

天気についての私見

福崎かずたろう

西に面した二階の部屋で、文庫本を読んでいた。9月も末の午後3時。

シューシュー サァァー

晴れたり曇ったりの秋の楊子江気団のどっちつかず曖昧模糊な天気を振っ切るように、突然、雨の波が襲ってきた。カタマリ状になった雨のカーテンが音をたてて西から走ってきたのが分かった。

パチパチバタバタバチパチ ドドオ

間髪を入れず、瓦・スレート・コンクリート、すべての屋根をまんべんなくぶち叩くブチ叩く。

パチパチぱりぱりパチパチぱりぱり

屋根を叩く道を叩く人を叩く鳥を叩くたたくタタクたたくったら徹底的に叩く！

私は窓を開けたままそうした景色に見入っていた。大粒の雨どもは、おのれを地上物に体当たりさせるのが至上の喜びとばかりに正直に鉛直に落ちて来る。窓からは直接雨は入っては来ないが、屋根に反射した雨粒どもが粉骨砕身、細かな霧となっても勢いをとどめ、私をぬらす。

え～ まあなんですね、日本という国はこのちょうど地球の真ん中でもない、端っこでもないという、ちょうどいいところにあるわけですし、そのせいで偏西風も吹けば大陸から冷たい風もやってくるし、南からは台風もやってくるという、じつに変化に富んだ気候風土になってるわけやね。中緯度地域の温帯気候帯の大特長である「四季」！ 素晴らしいですね。まあ、我々はこんなことは日常茶飯事なので、特別意識はしていませんけどね。小柳ルミコ風にちょっと変えて言う「いいですわねえ、日本の四季」ってなもんなのです。

というわけで、いきなり《理科 I 物理地学編 第二編地学編 第二章熱収支と大気の大循環》のイントロダクションみたいなことを書いてしまったが、まあ、とにかく日本に住んでる福崎君としては、季節季節の代表的な気候天候がそれぞれに好きなわけだ。そんななかでも特に私は「オオアラシ大好き人間」なわけです。これはもう「オオアラシ」がくると、もう何も手につかず、奇声を発しながら喜

び庭カケマワルという、ちょっとした興奮状態となるのだ。なぜ私がこのような変人になったか、その原因の一端を思い出したので、そうした記憶が「さめないうちに書き留めておこう」。

読者の皆さんの中で自宅に雷が落ちたことがあるという方、いらっしゃるだろうか。いらっしゃるまい、いるまい、おるまい、どおだ、まいったか。ワハハ。うちには落ちたことがあるんだぞお。おかげで家電製品が全滅だったんだぞお。凄いだろう。しかしさらに凄いことは、その雷が落ちた夏の午後3時。私は小学4年生（だったかな）。友達何人かと家の留守番をしていたんだ。恐かったんだぞお。稲光が光るとともに、建物全体が何者かに揺らされているといった感じで、恐くてだれも窓際には近寄れなかったもんね。暗い部屋の真ん中で集まって、息をひそめて外の様子をうかがってたもんね。

まあ、そうこうするうちに恐怖の数時間が過ぎ（もしかしたら1時間もたってなかったかもしれないけど）、雷雲は去り、小学生孤独と恐怖のカミナリ地獄から無事解放されたのだ。

そういった経験が、原体験として、私の記憶のおく深く潜在的な意識に、「頭にこびりついて」いるようなのだ。だからどうして「オオアラシ」大好き推進派なのかと問われれば、ちょっと答えに詰まるけど、ま、あれ以上のものはないと安心しきっているようなところがあるのであろうか。

などと、書いているうちに、先ほどの雨塊は程なく東へと去り、西には雨後のたおやかな薄色の雲が残り、南からは日が射してきた。向かいの家の瓦は雨に撃たれホコリを流し、今まぶしいばかりに太陽光を反射している。「オオアラシ」のあとの風景は美しいのだ。

椎名誠ふうに書いてみました・・・